

# 「心の理論」と文学：イアン・マキューアンの語りの視点と「志向性」

著者名(日)	武藤 哲郎
雑誌名	大妻女子大学紀要. 文系
巻	44
ページ	144-130
発行年	2012-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00000141/">http://id.nii.ac.jp/1114/00000141/</a>

## 「心の理論」と文学

― イアン・マキューアンの語りの視点と「志向性」―

武 藤 哲 郎

### はじめに

イアン・マキューアンの最新小説 *Solar* (2010) はノーベル物理学賞を受賞したマイケル・ビアー  
ド (Michael Beard) が主人公である。*Saturday* (2003) では脳神経外科医ヘンリー・ペローン  
(Henry Perowne) が、そして *Enduring Love* (1997) では無神論者で科学ジャーナリストの  
ジョー・ローズ (Joe Rose) が主人公であった。勿論架空の人物設定ではあるが、続けて 3 つの  
小説で主人公が科学者なのは、やはり「科学」への何らかのこだわりがマキューアンにあったと考  
えるのが妥当であろう。本人いわく、16 歳のとき科学と文学のどちらの道に進もうか真剣に悩ん  
だそうであるが、数学の成績が今一つで科学者への道を断念したらしい<sup>(1)</sup>。2007 年ポツダムでノー  
ベル賞受賞者たちを招いて気候変動に関するシンポジウムが開かれた。マキューアンをその会議  
に招いたドイツの物理学者ハンス・シュルンフーバー (Hans J. Schellnhuber) 教授は彼が難解  
な物理学の理論を楽しんで話しているのに驚き、「とかく現代の小説家たちは科学に関する知識が  
なくても 'cool' 気取りで済ませているが、マキューアンは全く違っていた」と話している<sup>(2)</sup>。ど  
うしてマキューアンは小説家になった今でも科学にこだわるのだろうか。「私が好きな小説や詩に  
ついて話すことが出来、かなり文学に通じている科学者に私は何人も会っている。ところが、彼ら  
が好きな科学について私は彼らに満足に話すことすら出来ない」と彼は言っている<sup>(3)</sup>。「科学を志  
す学生たちは今まで考えられ得る最も難しい問題を考えているのに、私たちは何をしているのか。  
昼まで寝て、多分 2 時からのチュートリアルに出席するのだろう」とも言っている。小説がテーマ  
においても手法においても行き詰っている現在、マキューアンが文学と科学の垣根を取り払って新  
しい視野を得ようとしていることは十分に考えられることである。しかし、科学者たちはもうすで  
に彼らの研究のヒントを文学に求めているのである。*Solar* の最終原稿が出来上がったとき、マキュー  
アンはケンブリッジ大学量子計算センターのグレーム・ミッチソン (Graeme Mitchison) に小  
説で書いた「物理学」が妥当であるか校正を依頼した。彼はそれにはごくわずかな訂正を加えただ  
けで、小説のある場面の書き直しを提案し、マキューアンはその場面を全面的に書き直したそうで  
ある<sup>(4)</sup>。

マキューアンの小説に興味を示しているもう一人の科学者がいる。現在イギリスで著名な動物学  
者のマット・リドレー (Matt Ridley) である。彼は科学者でありながら、何故かマキューアンの  
批評書 *Ian McEwan: Contemporary Critical Perspectives* (2009) の序文を書いている。リドレー  
はマキューアンが再三再四登場人物の心の中に入り込み、人間の心の「神秘性 ('mystery')」を解  
き明かそうとしているので、立派な科学者であると論じている。さらに、マキューアンのような優  
れた小説では次のような現象が見られると指摘している。

In a good novel not only does the reader know what the character is thinking;  
the reader knows what the character thinks that another character is thinking.<sup>(5)</sup>

「優れた小説において読者は、登場人物が何を考えているのか理解できるばかりでなく、その登場人物を通して別の登場人物が何を考えているのか理解できる」のである。これは、認知心理学の用語で「志向性」(‘intentionality’)と呼ばれる概念である。つまり、①「読者は登場人物が何を考えているのか理解できる」は、読者→登場人物で2重の志向性(second level of intentionality)、②「読者はその登場人物を通して別の登場人物が何を考えているのか理解できる」は、読者→登場人物→別の登場人物で3重の志向性(third level of intentionality)となる。小説において読者が登場人物の心を推測するという2重の志向性は、ごく当たり前に行われている作業である。ところが、3重の志向性ともなるとかなり高度な「読み」の作業となる。ましてや、読者→登場人物→別の登場人物→また別の登場人物→…、という4重以上の志向性ともなると、ほとんどの作家は敢えて手を付けようとはしない。ところが、それを難なくこなしているのがマキューアンであり、そこに目を付けて「心の理論」研究のヒントにしよう考えたのがリドレーなのである。リドレーは、現代人は5重の志向性までこなすことができるのではないかと言っている。

「心の理論」とは、人間の他者の心を類推できる能力を指す。現在、発達心理学、霊長類学そしてコンピューター科学をも巻き込んで体系化が急速に進んでいる新しい研究分野である。この能力が生まれつき人間に備わっていることは昔から知られていたが、それを科学的に証明する学問体系ができていなかった。つい最近になって発達し始めた認知心理学は人間の心や意識、いわば「目に見えない現象」を、動作や表情など「目に見える現象」を用いて解き明かそうとする学問である。ゆえに、「心の理論」研究は当初その「目に見える現象」を文学の世界に求めたのである<sup>(6)</sup>。何故なら、登場人物の心を読み取る作業はそれこそシェイクスピアの時代から行われていたことで、その読み取りのヒントとなる登場人物の動作や表情の例は事欠かないからである。このように認知心理学者たちは積極的に文学を利用しようとしているので、我々文学研究者も「心の理論」研究で用いられている「志向性」という認知心理学の用語を文学研究、特に「語り」研究に応用してよいのではないと思われる。そして、その可能性を探るのが本稿の目的である。

「心の理論」と文学の関係にいち早く着目した学者はリサ・ザンシャイン(Lisa Zunshine)である。彼女は*Why We Read Fiction: Theory of Mind and the Novel*の中で、『ダロウェイ夫人』には「6重の志向性」(‘sixth level of intentionality’)が見受けられると指摘している。ウルフは描出語法を駆使した「意識の流れ」によって現代小説を確立した作家である。彼女は頻繁に語りの視点を登場人物間で移動させることによって物語空間の広さ、あるいは価値観の多様性を描こうとした。ところが、「志向性」という新しい語りの概念を持ち込んでみると、ウルフの語りは複数の登場人物を起点とするので「並列的な視点移動」という枠組みに入り、「志向性」は一人の登場人物に起点を固定させて複数の登場人物をまるで串に刺すように貫いていくので「直列的な視点移動」という枠組みに入って区別できることになる。語りの「並列的な視点移動」と「直列的な視点移動」とは本質的に相反する性質を持っていると考えられる。「志向性」という概念を用いて、あらためてマキューアンの「語り」を見直した場合、彼の語りの特徴は、ウルフやジョイスではなく、語りの視点を一つに固定して「志向性」を高めているということで、むしろオースティンにかなりよく似ていることが分かる。さらに、「志向性」が高いということが、今までそれとなく言われてきたが具体的に証明されていない事実、すなわちマキューアンが「モラル」を重んじる作家であることの一つの裏付けとなるのである。

## 1. 「心の理論」と誤信念課題

「心の理論」とは他者の心の状態を類推できる能力であり、それを持つためには他者には自分と異なる「心」が存在することを認識していることが前提になる。この機能は古くから人間に備わっていると想定されてきたが、「心の理論」という語を最初に用いて概念の体系化をしようとしたのがデイビッド・プレマック (David Premack) とガイ・ウッドラフ (Guy Woodruff) の論文 ‘Does the chimpanzee have a theory of mind?’ (1978) においてである。彼らはチンパンジーにも「心の理論」が存在することを次のような実験で証明しようとした。大人のチンパンジーに人間の役者がさまざまな問題で苦勞をしているビデオを見せた。一つは、手を伸ばしてもバナナに届かない問題、もう一つは錠のかかった檻に閉じ込められて抜け出せない問題、最後はヒーターが故障して寒さで体を震わせている問題であった。この一連のビデオをチンパンジーに見せた後、この問題の解決策となる写真を3枚見せて正しいものを選ばせたのである。一つは、バナナを取るための棒、もう一つは檻の錠をあける鍵、最後は火の付いたろうそくである。そのチンパンジーは間違えることなく連続して正しい写真を選んだ。この実験の結果によってプレマックとウッドラフはチンパンジーにも「心の理論」が存在すると主張した。

ところが、霊長類学者の間ではこの学説は批判的に受け取られた。ある一定条件の実験をクリアしただけで、チンパンジーに「心の理論」が備わっている証明には不十分であるというのが彼らの主張である。バナナに手が届かないから棒を答えに選ぶというのは、いわばすでに敷かれた一本のレールに沿って思考法を導く一定条件の実験に他ならない。人間の「信念」(belief) は正しい場合と、誤っている場合がある。つまり「誤った概念」を信じている場合も、それを類推しなければ「心の理論」が備わっているという完全な証明にはならないわけである。ここで「誤信念課題」(‘false belief task’) が発案された。誤信念課題というのは先ほど述べた他者には「自分と異なる心」が存在することを前提とするものである。ハインツ・ヴィマー (Heinz Wimmer) とジョゼフ・パーナー (Josef Perner) が1983年に次のような実験を幼児に課している。「サリーがビー玉 (marble) をかごの中に入れて外に遊びに行く。ところが、アンはサリーが外にいる間に、そのビー玉を別の箱の中に移してしまう。サリーは外から帰ってきて、どこを探すだろうか？」というのが課題である。多くの幼児は「箱」の中と答えてしまう。つまり、アンが「箱」の中に移すのを見てしまっているので、「見ていない他者の心の存在」、つまりサリーの心を理解できていないのである。「かご」の中と正解を出すのは、ヴィマーとパーナーによれば大体幼児が3~4歳になってからで、この年齢になって初めて幼児に「心の理論」が備わってくると報告している。

## 2. 自閉症と心の理論：

### 『火星に降り立った人間学者』(An Anthropologist on Mars)

1985年、イギリスのケンブリッジ大学の発達心理学者サイモン・コーヘン (Simon Baron-Cohen) はこの誤信念課題を健全な子供たち、ダウン症の子供たち、そして自閉症の子供たちの3グループに課してみた。健全な子供たちとダウン症の子供たちはこの課題をクリアできたが、自閉症の子供たちでクリアできたのはほんのわずかであった。その自閉症の子供たちは他の二つのグループの子供たちよりも年が多く、知的年齢も高かったがそういう結果に終わった。コーヘンは繰り返して実験を行ったが結果は同じであったので、自閉症の子どもは「心の理論」に欠けるという発見

を論文 ‘Does the autistic child have theory of mind?’ として発表した。自閉症は、先天的脳機能障害によって引き起こされる認知障害のことであるが、その症状も発症のメカニズムも今もってはっきりとはしていない。「自閉」というから、自分の殻に閉じこもって他者とのコミュニケーションがうまく取れないことが症状の一番大きな特徴である。人と会っても目を合わせようとしないし、他者の遊びの輪の中に入ろうとせず自分の関心事にのみ没頭する。ひどい時には、レストランで他人のサンドイッチを取って食べてみたり、他人の体の匂いを嗅ぎまわったり、ストッキングをはいた女性の足に触ってみたりする。そうした行為を妨げられると癇癪を起してしまう。症状は患者の数だけあると言われている。ところが、人がたくさん歩いている歩道を人にぶつからずに自転車で駆け抜けてみたり、他の子供よりもはるかに多数のジグソーパズルを簡単にやってのけたり、桁数の多い数の計算も難なくこなしてしまったり、普通の子供では考えられないような能力を発揮している例も数多い。ヘリコプターに乗ってマンハッタンの光景を見せられた自閉症の患者が、大きなキャンパスに精密な街並みを、記憶だけに頼って再現して見せたのはテレビでも放映されて話題になった。脳神経学の発達に伴って脳のある部位の欠損がある特定の認知障害を起こすことがだんだんと解明されてきているが、逆にある部位の欠損がある特定の認知能力を高めているのが上述した症例である。自閉症は3歳位までにその症状が現れると言われている。「心の理論」は自閉症の発症のメカニズムを調べている過程で生まれてきた概念である。つまり、自閉症の認知障害の一つが「心の理論」の欠如なのである。ゆえに「心の理論」が備わっていないから自閉症であるとは勿論断定はできない。コーヘンの説は、「心の理論」が備わっていないから他者とのコミュニケーションに障害をきたしているのではないかという可能性を指摘したもので、自閉症のメカニズム解明と治療に一条の光を投げかけたことになる。

テンプル・グランディン（Temple Grandin）はコロラド州立大学で教育と研究に従事する自閉症の農学博士である。彼女は幼児期に自閉症と診断され、両親の献身的な介護あるいは近代的な設備を備えた施設での高度な治療のお陰で現在の地位を得ることができた。彼女は他人とのコミュニケーションに大きな支障をきたすことはなく、日常生活はごく普通の人と同じ生活をしている。博士論文も書いたほどであるから、先ほど触れた風景の記憶力が異常に優れた人と同様、自閉症の人の中では高度な知的能力を備えた人と言える。オリバー・サックス（Oliver Sacks）はこのような高度な知的能力を備えている自閉症の患者にインタビューして回っている神経科医である。彼女にインタビューした際のエピソードが、*An Anthropologist on Mars* (1995) としてまとめられた。「火星に降り立った人類学者」という言葉はグランディン自身が自分を表現した言葉で、日頃彼女が健全な周りの同僚たちとの生活の中で感じる小さな違和感を比喩的に表わしたものである。このような表現ができるのだから文学的才能はありそうに思える。サックスとの数日にわたる生活の中で興味ある出来事がいくつかあった。まず、サックスが長い時間飛行機に乗ってようやくグランディンのオフィスに着いた際の出来事である。彼は疲れていて、のども渴いていた。また、そのような表情をしていたはずである。当然彼は彼女が何か飲み物を勧めてくれると期待した。しかし、彼女はそれに一向気付かず、すぐに仕事の話に入ったのである。やはり、彼女は人の表情から心を読み取ることが不得手なのである。共に数日生活してから、彼女は自ら自分の独身生活について、「恋をすること、人を愛することがどういうことなのか想像がつかないし、実際に経験したこともないので結婚は考えられない」と言い出した。「恋をすること」は人を好きになると同時に、相手の心も読み取ってその相乗効果で愛情が高まっていくものと考えられるから、やはりグランディンにとっては無理だったのであろうか。サックスがインタビューを終えて帰る日が近づいたとき、文学作品が話題になった。彼女は『ロミオとジュリエット』を読んだとき、正直言って戸惑ったと話してい



る。彼女の言葉をそのまま引用すれば、「私には彼らが何をしようとしているのか全く分からなかった」そうである<sup>(7)</sup>。「心の理論」に欠けるということは、相手の心が分からないことであり、登場人物の心の動きが分からなければ到底文学作品は理解できない。しかし、それはあくまでも文学者の理論上の結論である。認知心理学からすれば、「心の理論」欠損と文学に興味を示さないことの関連性は、その証拠となる実験データがないので関連性は示唆されるが、科学的な証明はなされていないことになる。

## 2. 「心の理論」と文学：*Why We Read Fiction—Theory of Mind and the Novel*

ザンシャインは「心の理論」欠如と文学に関心を示さないことの関連性について以下のように著書の中で述べている。

Whereas the correlation between the impaired ToM and the lack of interest in fiction and storytelling is highly suggestive, the jury is still out on the exact nature of the connection between the two. .... Thus one preliminary implication of applying what we know about ToM to our study of fiction is that it makes literature as we know it possible. .... it exists because we are creatures with ToM.<sup>(8)</sup>

彼女は「心の理論」欠損とフィクション（小説）に関心を示さないことの関連性は大いに考えられることであるとしながらも、二つの関係を立証する具体的な説明がなされていない現在早急に二つを関連付けるのは避けるべきだろうと言っている。彼女は「心の理論」なるものが文学研究にまず示唆するものがあるとすれば、それは「心の理論」が文学を可能にしていることであると述べている。なぜなら、我々人間は「心の理論」を備えた生き物であるからと彼女は指摘している。この主張は十分に頷けるものである。というのは登場人物の心を読むことは文学の前提条件になるからである。ザンシャインは「なぜ我々は小説を読むのか」の答えを「心の理論」を用いて次のように説明している。

To return to my earlier speculations of why we read fiction, I can say that by imagining the hidden mental states of fictional characters, by following the readily available representations of such states throughout the narrative, and by comparing our interpretation of what the given character must be feeling at a given moment with what we assume could be the author's own interpretation, we deliver a rich stimulation to the cognitive adaptations constituting our Theory of Mind. Many of us come to enjoy such stimulation and need it as a steady supplement to our daily social interactions.<sup>(9)</sup>

彼女は私たちが小説を読む理由は、作者の語りの中にそのヒントとなるような現象を追求めながら登場人物の隠れた心を想像し、その瞬間登場人物が感じているに違いないと思う私たちの解釈と作者の意図とを比較することによって、私たちの「心の理論」を形成する認知能力に豊かな刺激を与えるからだと言っている。要するに私たちが小説を読むのは「心の理論」が健全に働いているという確認の喜びを感じたいからなのだというのがザンシャインの主張である。「心の理論」という概念が作り出されたからこそ、今まで説明されてこなかった小説を読む「喜び」の一つが科学的に

解明されたことになる。

ザンシャインは、さらに「心の理論」と文学の関係において早急に結論付けてはならない重要な指摘をもう一つしている。それは認知心理学者が使う「心の理論」の定義と、我々文学研究者たちが使う「心の理論」の定義の微妙な違いである。彼女は著書の冒頭を次のような質問で始めている。

Let me begin with a seemingly nonsensical question. When Peter Walsh, a protagonist of Virginia Woolf's *Mrs. Dalloway*, unexpectedly visits Clarissa Dalloway "at eleven o'clock on the morning of the day she [is] giving a party," and, "positively trembling" and "kissing both her hands" (40), asks her how she is, how do we know that his "trembling" is to be accounted for by his excitement at seeing his old love again after all these years and not, for instance, by his progressing Parkinson's disease?<sup>(10)</sup>

ヴァージニア・ウルフの『ダロウェイ夫人』の冒頭でピーター・ウォルッシュは何十年かぶりかで、昔恋人であったクラリッサ・ダロウェイの家を突然訪れる。彼が彼女の両手にキスをしたとき「あきらかに体が震えていた（‘positively trembling’）」のである。ザンシャインの質問の意図は、この「体の震え」を読者はどうして無意識のうちにピーターが久しぶりに恋人に会った興奮からくるもので、たとえば、進行中のパーキンソン病ではないと断定できるのかということである。この小説が好きな読者であれば、ピーターの震えがもし病気が原因であればウルフはそうに言うはずだとザンシャインは指摘する。彼女は、さらに一步進んで、ではウォルッシュの震えが病気からくるものであったとしたら、なぜウルフはそうにはっきりと読者に指摘しなければならなかったのかと再度質問を投げかけている。ザンシャインのこのような執拗な質問の裏には、文学研究者は「体の震え」の原因としてパーキンソン病を無意識に除外するが、認知心理学者は除外しないという前提が隠されているのである。

もう一つの例を参考に考えてみよう。スタンリー・フィッシュ（Stanley Fish）のエッセイ“*How to Recognize a Poem When You See One*”（1981）からの引用である。

While I was in the course of vigorously making a point, one of my students, William Newlin by name, was just as vigorously waving his hand. When I asked the other members of the class what it was that [he] was doing, they all answered that he was seeking permission to speak. I then asked them how they knew that. The immediate reply was that it was obvious; what else could be thought of doing? The meaning of his gesture, in other words, was right there on its surface, available for reading by anyone who had the eyes to see. That meaning, however, would not have been available to someone without any knowledge of what was involved in being a student. Such a person might have thought that Mr. Newlin was pointing to the fluorescent lights hanging from the ceiling, or calling our attention to some object that was about to fall (“the sky is falling,” “the sky is falling”). And if someone in question were a child of elementary or middle-school age, Mr. Newlin might well have been seen as seeking permission not to speak but to go to the bathroom, an interpretation or reading that would never have occurred to a student at Johns Hopkins or any other institution of “higher learning.”<sup>(11)</sup>

フィッシュは講義中にある学生が手を挙げているのを見て、彼は何をしているだと周りの学生たちに聞いた。勿論彼は学生が質問したいから手を挙げていることは当然分かっている。多分「解釈」はある特定の条件下で決まるもので、他の条件下では異なるという講義をフィッシュはしていたのであろう。それを学生たちに、願ってもない具体例が出てきたので、それを用いて分かりやすく説明したかったと考えられる。大学の講義室で授業中に学生が手を挙げれば、それは質問したいからである。たとえば、その学生が教室ではなくコンサートホールにいたとしたら、観客たちは手を挙げている彼を見て、地震で天井が落ちてくることを知らせようとしていると思う。さらにその学生が小学校の教室にいるならば、周りの子供たちはトイレに行きたいのだと思うはずである。フィッシュは、そういった解釈は絶対に大学という高等教育機関ではおこらないはずだと結んでいる。ところが、これは文学研究者による解釈であって、認知心理学者はたとえその学生が大学の教室にいたとしてもトイレに行きたいという欲求を除外しないのである。文学と科学の根本的な違いがそこにありそうである。

ザンシャインは、文学研究者と認知心理学者との「心の理論」の定義の違いを次のような例で説明している。

For the lay reader, the example of a glaring failure in mind-reading and communication might be a person's interpreting her friend's tears of joy as tears of grief and reacting accordingly. For a cognitive psychologist, a glaring failure in mind-reading would be a person's not even knowing that the water coursing down her friend's face is supposed to be somehow indicative of his feelings at that moment.<sup>(12)</sup>

ある人物が涙を流している場合、ずぶの素人読者の極端な失敗例は喜びの涙を悲しみの涙と取り違えてしまって、それに従ってさらに間違った読み込みをしてしまうことである。認知心理学者の極端な失敗例は、顔を伝い落ちる水がその時のその人物の感情を表しているとさえ気付かないことなのである。ということは、ある人物が涙を流しているのを見た場合、文学研究者は無意識のうちにそれがその人物の感情を表していると考え、認知心理学者はまずそれが目に入ったごみによるものか、あるいは彼の感情を表すものか考えてしまうことである。つまり、文学研究者が「心の理論」の対象として扱うのはあくまでも「架空の人物」であって、認知心理学者は「現実の人間」なのである。さらに、具体的に言えば、認知心理学者が扱うのは人間の「現実の心」であって、文学研究者が扱うのは人間の「架空の心」なのである。これが大きな、とても大きな重要な違いとなる。

### 3. オースティンの語りの視点と志向性：キャサリン夫人への密告者について

心理描写にかけては定評のある近代文学のジェイン・オースティンの語りの視点と志向性がどうなっているのか検証してみたい。次の引用は『自負と偏見』からである。物語の後半部分、会ったときの第一印象とダーシーは違うことにエリザベスは気付く。しかし、彼の突然の愛の告白を拒絶したエリザベスからすれば、もう一度ダーシーからの愛の告白を待つのは愚かなことなのかもしれない。この揺れ動くエリザベスの心をオースティンは次のように描く。

'If he does not come to me, *then*,' said she, 'I shall give him up for ever.' The gentlemen came; and she thought he looked as if he would have answered her hopes; but, *alas!* the



ladies had crowded round the table, where Miss Bennet was making tea, and Elizabeth pouring out the coffee, in so close a confederacy, that there was not a single vacancy near her, which would admit of a chair. And on the gentlemen's approaching, one of the girls moved closer to her than ever, and said, in a whisper.

'The men shan't come and part us, I am determined. We want none of them; do we?'

Darcy had walked away to another part of the room. She followed him with her eyes, envied every one to whom he spoke, had scarcely patience enough to help anybody to coffee; and then was enraged against herself for being so silly!<sup>(13)</sup> [下線筆者]

オースティンの語りは三人称の視点から、つまり「神の語り」が基本である。しかし、上の引用のように感情移入があってエリザベスの視点から語られる場合が作品中かなり多い。「もし私のところにやって来ないのなら、そのときはもう彼のことはあきらめるわ」というのは引用符で括られているが別にエリザベスが声に出して言っているわけではない。劇における内的独白のようなものである。現代小説では頻繁に見られる自由間接話法（描出話法）がなかった時代であるから、登場人物の心理を描こうとすればどうしてもこのような表記の仕方になってしまう。ただし、オースティンのエリザベスの意識を生き生きと描こうとする力が古い伝統的な語りの垣根を飛び越えるように、下線部で示した地の文章に見られる感嘆詞 'alas!' とか 'so silly!' が自由間接話法の先駆けとして見られるのは興味深いことである。繰り返しになるが、『自負と偏見』の語りは古典小説から受け継がれてきた伝統的な三人称の語りで、時としてエリザベスに語りの視点が移る。しかし、現代小説に見られるような頻繁な視点の移動、たとえば、ダーシーあるいはベネット氏やベネット夫人に移るということはけしてない。語りの視点が一つにしっかりと固定されているのである。ゆえに、読者はダーシーが突然エリザベスに愛を告白したとき、彼女と同じように驚愕してしまう。ダーシーの心が全く描かれていなかったからである。ここで考えなければならないことは、ダーシーの突然の告白はオースティンが最初からプロットとして意図していたもので、伝統的な三人称の語りの束縛から偶発的にそうってしまったというわけではないことである。オースティンはその束縛を逆手にとってダーシーの突然の告白にインパクトを与えたと考えるのがより自然である。

『自負と偏見』の中でもう一つ突然と思われる出来事がある。キャサリン夫人のロングボーンへの突然の来訪である。彼女は甥のダーシーとエリザベスの「婚約の噂」を聞きつけて、身分の違いを理由にその破棄をエリザベスに迫る。まだ婚約をしたわけではないことは告げず、エリザベスは自分の気持ちに素直になる決意を強く表明して、キャサリン夫人を怒らせて帰してしまう。彼女は興奮がさめると、その噂の出所について推測をめぐらす。

It was a rational scheme to be sure! but from what the report of their engagement could originate, Elizabeth was at a loss to imagine; till she recollected that *his* being the intimate friend of Bingley, and *her* being the sister of Jane, was enough, at a time when the expectation of one wedding, made every body eager for another, to supply the idea. She had not herself forgotten to feel that the marriage of her sister must bring them more frequently together. And her neighbours at Lucas lodge, therefore, (for through their communication with the Collines, the report she concluded had reached lady Catherine) had only set *that* down, as almost certain and immediate, which *she* had looked forward to as possible, at some future time.<sup>(14)</sup>

エリザベスが考えたのは、ダーシーはビングリーの親しい友人であり、ジェインは彼女の姉である。二人が間もなく結婚する話を聞けば、当然世間の人はダーシーとエリザベスとの結婚の可能性も期待するであろうし、また噂もするであろうということである。多分、ルーカス夫人がその可能性に気づき、コリンズ夫妻に話し、コリンズがキャサリン夫人に知らせて、彼女がそういう結論に至ったのではないかとエリザベスは考える。「志向性」から考えると、オースティン→エリザベス→ルーカス夫人→コリンズ夫妻→キャサリン夫人となって、ここには5重の志向性があることになる。伝統的な三人称の語り、つまり、他の登場人物に視点を動かさないで、エリザベス以外の登場人物の心を描こうとすれば、どうしてもエリザベスの視点から推測することになる。「志向性」の出番となる。しかし、婚約の噂の出所としてエリザベスの推測に疑問を投げかける批評家も少なくない。ジョン・サザランド (John Sutherland) がその一人である。婚約の噂の密告者 (噂の出所) がルーカス夫人とすれば、ゴシップ好きの彼女がベネット夫人に伝えないわけではない。ベネット夫人はああいう性格であるから、噂を聞いていればダーシーへの態度が一変するはずであるというのが彼の疑問の理由である。サザランドが推測した本当の密告者はシャーロット (Charlotte) である<sup>(15)</sup>。プロット上無理なく、エリザベスに何らかの敵意を持っている女性とすれば物語後半から姿を消した彼女以外にない。事の真実はさておき、ここで一つ言えることは「志向性」が高くなればなるほど、前もって視点の移動でそれらの登場人物の心理が描かれていないわけだから、それだけプロットの信憑性に負担がかかってくるということである。もし、仮にベネット夫人のしばらく様子を見てみようという心理 (サザランドは否定しているが) が描かれていれば何ら疑問は残らなかったのである。

#### 4. ウルフの語りの視点と志向性

次に現代文学のヴァージニア・ウルフでは語りの視点と志向性がどうなっているのか検証してみたい。『ダロウェイ夫人』からの引用である。ブルートン夫人 (Lady Bruton) の屋敷での昼食会にヒュー・ウィットブレッド (Hugh Whitbread) とリチャード・ダロウェイ (Richard Dalloway) が招かれている。彼女は政治に関心があり、自分の意見をタイムズ紙に発表してもらいたいと考えており、編集者はヒューの推薦があれば記事にするであろうことを十分承知している。ブルートン夫人はヒューがデザートを食べ終わり煙草に火を付けるのを待ってから、おもむろに秘書のミス・ブラッシュ (Miss Brush) に原稿を取りに行かせる。

And Miss Brush went out, came back; laid papers on the table; and Hugh produced his fountain pen; his silver fountain pen, which had done twenty years' service, he said, unscrewing the cap. It was still in perfect order; he had shown it to the makers; there was no reason, they said, why it should ever wear out; which was somehow to Hugh's credit, and to the credit of the sentiments which his pen expressed (so Richard Dalloway felt) as Hugh began carefully writing capital letters with rings round them in the margin, and thus marvelously reduced Lady Bruton's tangles to sense, to grammar such as the editor of the *Times*, Lady Bruton felt watching the marvelous transformation, must respect.<sup>(16)</sup>

ザンシャインはこの文章には6重の志向性があると言っている。彼女によれば、「①万年筆の製造

者はペン先がけして摩耗しないと考えている（1重）。②ヒューは万年筆の製造者はペン先がけして摩耗しないと考えていると言っている（2重）。③ブルートン夫人はタイムズ紙の編集者が彼女の考えを尊重して記事にしてほしいと思っている（2重）。④ヒューは、万年筆の製造者がけしてペン先が摩耗しないと思っているので、タイムズ紙の編集者がこのペンで書かれた考えを尊重して出版するであろうとブルートン夫人とリチャードに信じてほしいと思っている（4重）。⑤リチャードは、ヒューが万年筆の製造者がけしてペン先が摩耗しないと思っているので、タイムズ紙の編集者がこのペンで記された考えを尊重して記事にするであろうとブルートン夫人とリチャードに信じてほしいと思っていることを知っている（5重）。⑥リチャードは、ヒューが言うように万年筆の製造者はペン先がけして摩耗しないと思っているのでタイムズ紙の編集者はこのペンで書かれた考えを尊重して出版するであろうとブルートン夫人は確かに信じていると思っている（5重）。⑦ウルフは我々読者に「とりチャード・ダロウェイは感じた」という挿入節を入れることによって、リチャードは、ヒューが万年筆の製造者がけしてペン先が摩耗しないと思っているので、タイムズ紙の編集者がこのペンで記された考えを尊重して記事にするであろうとブルートン夫人とリチャードに信じてほしいと思っていることを知っているということを認識させようとしている（6重）。」なのである（下線部はザンシャインの原文ではイタリクス）<sup>(17)</sup>。

読者にとって、このような6重の志向性の文章はかなり難解なものである。しかし、ウルフはどうしてこの場面に限って多重の志向性の文章を書いたのであろうか。この場面に至るまでウルフは語りの視点をかなり頻繁に変えていた。クラリッサ、ピーター、セプティマス、ヒュー、そしてブルートン夫人と視点が自由に動いていた。語りの視点をより多くの登場人物に据えることはそれだけ価値判断の視点が多くなり、いわばより現実に近い混沌とした世界を捉えることができることになる。ところがこの場面に限って、語りの視点はリチャードだけであり、ヒューもブルートン夫人もリチャードが考えていることを読み取ろうとはしていない。ウルフはあえて、リチャード→ヒュー→万年筆の製造者→タイムズ紙の編集者→ブルートン夫人と直列的な志向性を維持することによって、ヒューやブルートン夫人ではなくリチャードによる他者の心の類推の仕方を読者に読みとらせようとしたのである。ブルートン夫人は政治に関心はあるが、必ずしもその意見は褒められたものではない。彼女はヒューの威を借りれば自分の意見を新聞に発表できると思う。ヒューにしても、長年使っていた万年筆で彼女の原稿を校正し、自分の流暢な筆跡を見ればタイムズ紙の編集者はヒューのお墨付きがあったと考える。リチャードにすれば、それらすべてが中身のないくだらない茶番（‘all stuffing and bunkum’）に見えるのである。ザンシャインはこのことを以下のように述べている。

The apparently unswerving, linear hierarchy of the scene—Richard can represent the minds of both Hugh and Lady Bruton, but Hugh and Lady Bruton cannot represent Richard’s representations of their minds—seems to enforce the impression that each mind is represented fully and correctly.<sup>(18)</sup>

ある一つの出来事、ある一つの場面を異なる視点で描くということは、その出来事あるいはその場面の異なる解釈がその数だけあることになる。つまり、それだけ異なる価値判断があることになる。それが直列的な志向性に整理されれば、そこで類推された異なる人物の心の動きは十分に正確に（‘fully and correctly’）に把握されたばかりでなく、語りの視点に立った人物の価値判断が正しかったことを示すのである。よって、「語りの視点」と「志向性」は本来相反するものであるという仮

説が成り立つ。視点の数が多ければ、それだけ価値判断の基準が多くなり作者は自分自身のモラルの価値判断を避けてより混沌とした現実社会を描くことになる。しかし、時として一つの結び目を作らなくてはならないように、作者は自分の価値判断を下さなければその小説が成り立たない場合が出てくる。それがウルフのこのリチャード・ダロウェイの6重の「志向性」の場面なのである。この「正しい価値判断」に疑問が残らないのは、この6重の志向性の前にウルフが視点を移動させてブルートン夫人やヒューの心理を十分に描いていたからであると言える。ただし、オースティンの場合は、そうではなかった。

## 5. マキューアンの語りの視点と志向性

マキューアンの初期の小説から最新の *Solar* にいたる 13 作品の語りの視点と志向性を概観してみると、‘I’ が語り手であるのは *First Love, Last Rites* (1975), *The Cement Garden* (1978), *Black Dogs* (1992), *Enduring Love* (1997) の 4 作品とかなり多い。三人称が語り手なのが、*The Comfort of Strangers* (1981)。三人称が語り手で一人の主人公に視点が移動するのが、*The Child in Time* (1987), *Saturday* (2005), *On Chesil Beach* (2007), そして *Solar* (2010) である。三人称が語り手で二人の主人公に視点が移動するのが、*The Innocent* (1984), *Amsterdam* (1998), *Atonement* (2001) である。つまり、彼の語りの視点はオースティンのようにしっかり一つに固定されていて、ウルフやジョイスのように複数の登場人物に視点が頻繁に移動することはない。さらに、「志向性」からみてもオースティンのようにかなり高いのが分かる。考えてみれば、語りの視点を一つに固定すれば、他の登場人物の心を描こうとした場合、彼らに視点が移動できないので、どうしても「志向性」が高くなるのは必然的な現象と言える。しかし、逆に語り手・作者の価値判断がしっかりと見えてくる。次の引用は、*Enduring Love* からである。ジョーは最後までゴンドラのロープから手を離さずに亡くなった医師ジョン・ローガン (John Logan) の妻ジーン (Jean) に会いに行く。ジョーは自分が最初にロープから手を離したのではないかという妄想に近い自責の念に駆られている。彼からすれば、ゴンドラに乗っている少年を助けようと最後まで手を離さなかったジョンは自分の命を顧みない勇気ある人物に映る。ところが、ジーンはそうは考えていなかった。

She was shaking her head as I spoke. ‘No, no. You’ve got to listen to me. You were there, but I know more about this than you. There was another side to John, you see. He always wanted to be best, but he was no longer the all-round athlete he once was. He was forty-two. It hurt. He couldn’t accept it. And when start to feel like that ..... I knew nothing about this woman. I suspected nothing, it didn’t occur to me, I don’t even know if she was the first, but I know this. She was watching him, and he knew she was watching, and he had to show her, he had to prove himself to her. He had to run right into the middle of the scene, he had to be the first to take the rope and the last to let go, instead of doing what he usually would—hanging back and seeing what was best. That’s what he would have done without her, and it’s pathetic. He was showing off to a girl, Mr Rose, and we’re all suffering for it now.’<sup>(19)</sup>

ジョンが乗っていた車には女物のスカーフが残されていた。つまり、事件の現場には夫はある女性と一緒にいたことになる。夫は娘のレイチェル (Rachael) が生まれてからは趣味の山登りはし

なくなっていたし、その他一切危険なことからは意識的に遠ざかっていて、友人たちからはからかわれもしていた。そんな夫が人の命を救うために身の危険を顧みない行動に走るのは妻のジーンにすれば考えられないことである。彼女は、夫が現場でその女性が彼の行動を見ていることを知っていたことに気付いているのである。夫はその女性に男らしいところを見せたかった。そのことがジーンを苦しめているのである。ここでは、マキューアン→ジョー→ジーン→ジョン→その女性、となって5重の「志向性」があることになる。ただし、ジーン→ジョンの箇所があとで誤解であることが判明する。

## 6. *Solar* における語りの視点と志向性、そしてモラル

マキューアンの最新作 *Solar* の語りの視点は三人称の語りが基本で、主人公ビアードに語りの視点が移るが、他の登場人物に移ることはけしてない。オースティンの『自負と偏見』と全く同じである。志向性も高く、5重になっている例がある。引用は敢えてしないが、小説の後半部で刑務所から出たターピン (Tarpin) が人工光合成をニューメキシコで開発しようとしているビアードに会いに来る場面である。彼の意に反してターピンはオルダス (Aldous) を殺害したのはパトリース (Patrice) だと思っている。だから、彼女のために彼は自ら罪を背負って刑務所に入ったのである。マキューアン→ビアード→ターピン→パトリース→オルダスとなって、この場面は5重の志向性になっている。しかし、『ダロウェイ夫人』の6重の志向性のケースと違い、前述した *Enduring Love* と同じなのは、ターピンがパトリースが考えていることを誤解していることである。このように、マキューアンは最近の小説において、故意に間違った推測を登場人物にさせることによって、小説のプロットを大きく展開、すなわち主人公の人生を大きく狂わせることが多い。前述した *Enduring Love* ではジーンが夫の心を誤解し、*Atonement* ではブライオニー (Briony) がロビー (Robbie) の心を誤解していずれもそれが彼らの人生を大きく変化させてしまう。この誤った他者の心の類推は1章で述べた「誤信念課題」、すなわち「心の理論」が備わっていないとマキューアンが意図した「恐怖」あるいは「おかしさ」をうまく読み込めないのである。ビアードも *Solar* において再三再四他者の心を類推しようとする。しかし、前述したターピンのケースのように誤解してしまう場合も少なくない。中でも一番傑作なのは列車の中で他人のクリスマスを自分のものだと思って食べてしまう ('unwitting thief') 場面である。

*Solar* における志向性は高い。ビアードはかなり正確に他者の心を類推している。自分の心の中の意識も正確に捉えている。価値判断基準も理論的で「正しい」。しかし、それは「彼にとっては」正しいのであって、世の中の価値判断基準に照らし合わせてみるとはなはだ疑問が残る。ビアードはノーベル物理学賞を受賞した科学者ではあるが、人間的にはかなり問題がある。5回目の結婚でありながら、2年間で11回の浮気をしてパトリースを怒らせ、ターピンとの不倫に走らせ、ひいてはそれがオルダスの事故を引き起こす原因となった。離婚後もメリッサ (Melissa) と関係を持ち、娘のカトリオーナ (Catriona) が生まれても、アメリカ人のダーリーン (Darlene) と浮気を重ねてしまう彼である。食事に関しては、美味しいものがあればたとえ空腹でなくても見境なく食べてしまう。35キロも平均体重を上回り、半ばアル中でもあり、ずんぐりむっくりで、頭も禿げかかり、なぜこのような男が女性にもてるのか不思議であるとマキューアンは小説の冒頭で書いている。性欲、食欲、金銭欲、名声欲、全てに関して自ら歯止めが利かない彼である。ただし、頭が良いので「心の理論」、つまり他者の心を類推する能力は類稀である。5重の志向性は難なくこなしてしまう。*Solar* の面白さはこのビアードの他者の心を類推する「歪み」あるいは「過ち」にあ



る。小説のクライマックスでは、ビアードがオルダスの特許を横取りにしたことが判明し、それを知ったアメリカ人のパートナーのハマー（Hammer）が施設建設に要した多額の費用の損害賠償を彼に求めようとする。ハマーはビアードに最後に何か言うことはないかと訊かれ、「一つだけある。こんな事態になったのはみんなお前のせいだ。ざまあみろ」と言う。まさにそうである。タービンが出所したことで遅かれ早かれビアードの証拠捏造は明るみに出るだろう。そうすると、間違いなくビアードは刑務所送りになる。さらに、レストランで食事をしようとしている彼の目の前には、結婚を迫るメリッサとダーリーンが迫って来る。もう彼は、文字通り八方塞である。自分の末路に気付いた瞬間、彼は二人の女性の後にコアラのバッグを背負った可愛いカトリオーナが自分めがけ走って来るのを見る。ビアードは思わず両手を開いて、娘を抱きしめようとする。彼は初めてこの時人並みの「愛」を実体験する。しかし、あまりに遅すぎたのである。

次の引用は、ケンブリッジ大学の物理学者ミッチソンがマキューアンに推敲を提案し、彼が全面的に書き直した場面である。地球温暖化を実際に見ようと著名人が集まって北極に遠征した。科学者はビアードだけで、あとは芸術家たちだけである。北極での「貴重な」体験を終えて、彼は遠征の最終日を船の上で夕食を取り、仲間たちと雑談に興じていた。そのとき、ひょろ長いメレディス（Meredith）という名の小説家（マキューアンは多分自分をモデルにしたのであろう）が、まるでその場所にビアードがいないかのように「ハイゼンベルグ不確定性原理」とモラルの類似性について指摘し始めたのである。

Listening, as he usually did, with Jesus at his side from their corner of the mess room, Beard interjected only once, on the last evening when a gangling novelist called Meredith, appearing to forget there was a physicist present, said that Heisenberg's Uncertainty Principle, which stipulated that the more one knew of a particle's position, the less one knew of its velocity, and vice versa, encapsulated for our time the loss of a 'moral compass', the difficulty of absolute judgements. Beard was peevish in his interruption. .... Beard, just finishing his eighth glass of wine and feeling nose and upper lip elevate in contempt for an ignorant trespasser on his field, said loudly that the principle was not incompatible with knowing precisely the state of, say, a photon, so long as one could observe it repeatedly. The analogy in the moral sphere might be to re-examine a moral problem a number of times before arriving at a conclusion. But this was the point—Heisenberg's Principle would only have application if the sum of right plus wrong divided by the square root of two had any meaning.

The silence in the room was not so much stunned as embarrassed. Meredith stared helplessly as Beard brought his fist down hard on the table. 'So come on. Tell me. Let's hear you apply Heisenberg to ethics. Right plus wrong over square root of two. What the hell does it mean? Nothing!' <sup>(20)</sup>

メレディスは「素粒子」の位置が分かれば分かるほどその「速度」が分からなくなり、逆に「速度」が分かればそれだけ「位置」が分からなくなるというハイゼンベルグ不確定性原理は、価値基準（視点）が変わってモラルの判断基準が混沌としている現代社会と類似していると主張した。マキューアンは最初この箇所を難解な物理学の理論を振りかざして、その「関係」を否定するだけの原稿を書いていた。しかし、ミッチソンは直接「モラル」を否定するようにマキューアンに進言したので

ある。自分の領域を侵害されて怒ったビアードは、酒の酔いに勢いを増して、「正しい」プラス「悪い」の平方根割る「正しい」プラス「悪い」の解は「無」だと叫んで、あっけにとられて彼を見つめる人々の前でモラルを否定するのである。モラルのない男がモラルを否定することほど皮肉的なものはない。

## おわりに

認知心理学者が用いる「心の理論」と、我々文学研究者が用いる「心の理論」（オースティンが読者に要求した「読みの姿勢」と同じと考えられる）は他者の心を類推する能力を指していることでは同じだが、認知心理学者が「現実の心」を、文学研究者が「架空の心」を扱っていることで大きく違う。ピーター・ウォルッシュが体を震わせた原因について、認知心理学者はパーキンソン病を除外しないが、文学研究者は無意識のうちに除外するのは、「体の震え」について書けばウルフは何十年かぶりでクラリッサに会うピーターの「心の興奮」を読者が無理なく類推すると考えたからである。アラン・パーマー（Alan Palmer）は「必然的に小説は不完全で空白（‘blanks’）が多く、何かは語られているが全ては語られていない欠落（‘gaps’）がある」と言っている<sup>(21)</sup>。オースティンの『自負と偏見』ではフランス革命が全く語られていなく「空白」である。キャサリン夫人のロングボーンへの突然の来訪の理由はエリザベスとダーシーとの婚約が原因であることは語られているが、彼女へのその噂の密告者が誰であるか語られていなくて「欠落」である。もとより小説家は全てを語る必要はない。「架空の心」を作り上げるために不必要なものは除外してよいのである。だから、パーキンソン病は除外されるのである。逆に、マキューアンはこの「欠落」に関して読者に意図的に誤った読み込みをさせる内容の小説を最近書いている。*Atonement* におけるブライオニーのロビーへの誤った思い込み、*Enduring Love* におけるジーンの夫への誤解、*Solar* におけるビアードのターピンへの極度の恐怖がそうである。これら全てが小説の思いもかけないプロット展開に大きな役割を果たしている。「志向性」が高いからそうなのであって、ウルフのように視点を頻繁に変えていてはけして起こらない「不意の出来事」なのである。認知心理学の「心の理論」研究は始まったばかりであるし、文学への応用も今は手探りの状態である。しかし、「志向性」を例にとっても分かるように「心の理論」は文学にとって今後も興味ある研究分野であり続けるに違いない。

### 【注】

- (1) ‘It’s good to get your hands dirty a bit’, p. 1.
- (2) *Ibid.*, p. 3.
- (3) *Solar* Author Ian McEwan: ‘Does art make people better? The jury’s still out’, p. 1.
- (4) ‘Imagining a universe for Ian McEwan’, p. 1-2.
- (5) *Ian McEwan*, p. vii.
- (6) たとえば、子安増夫は『心の理論』でロゼッティの詩を引用し、昔人間は風の中に心を読み取ろうとしていた例を挙げている。
- (7) *An Anthropologist on Mars*, p. 247-248.
- (8) *Why We Read Fiction*, p. 10.
- (9) *Ibid.*, p. 24-25.
- (10) *Ibid.*, p. 3.
- (11) “How to Recognize a Poem When You See One”, pp. 110-111.

- (12) *Why We Read Fiction*, p. 13-14.
- (13) *Pride and Prejudice*, p. 259-260.
- (14) *Ibid.*, p. 275.
- (15) *The Literary Detective*, p. 491.
- (16) *Mrs. Dalloway*, p. 108.
- (17) *Why We Read Fiction*, p. 32-33.
- (18) *Ibid.*, p. 34.
- (19) *Enduring Love*, p. 122-123.
- (20) *Solar*, pp. 76-77.
- (21) *Fictional Minds*, p. 34.

【参考文献】

- Austen, Jane. *Pride and Prejudice*, Oxford University Press, 2004.
- Baron-Cohen, Simon. *Mind Blindness*, A Bradford Book, 1997.
- Fish, Stanley. "How to Recognize a Poem When You See One", *American Criticism in the Poststructuralist Age*, ed. Ira Konigsberg: University of Michigan Press, 1981.
- Groes, Sebastian, ed. *Ian McEwan: Contemporary Critical Perspectives*, Continuum, 2009.
- McEwan, Ian. *Enduring Love*, Jonathan Cape, 1997.
- . *Solar*, Jonathan Cape, 2010.
- Mitchison, Graeme. 'Imagining a universe for Ian McEwan', *New Scientist*, 31 March 2010.
- Palmer, Alan. *Fictional Minds*, University Nebraska Press, 2004.
- Sacks, Oliver. *An Anthropologist on Mars*, Picador, 1995.
- Steinberg, Julie. 'Solar Author Ian McEwan: Does art make people better? The jury's still out', *Wall Street Journal: Speakeasy*, 7 April 2010.
- Sutherland, John. *The Literary Detective*, Oxford University Press, 1999.
- Wroe, Nicholas. 'It's good to get your hands dirty a bit', *The Guardian*, Saturday 6 March 2010.
- Zunshine, Risa. *Why We Read Fiction—Theory of Mind and the Novel*, The Ohio State University Press, 2006.
- 子安増夫『心の理論：心を読む心の科学（岩波科学ライブラリー 73）』，岩波書店，2010。
- 茂木健一郎『心を生み出す脳のシステム』，NHK ブックス，2001。